

近代家族とロマンティック・ラブ・イデオロギーの2類型

大塚 明子

1. 問題設定

夫は外で働き、妻は家庭内で主婦として家事・育児に専従し、子供を含めた家族成員が他者とは分かち得ない強い情緒的な絆で結ばれている—アリエス以降の社会史・歴史社会学は、従来普遍的なものとして捉えられてきた以上のような家族のあり方が、実は近代社会において初めて出現したものであり、従って歴史的に限定的なものであることを発見した。さらに1990年代には、このような欧米の家族研究の成果を受けた論者たちにより、日本の戦前の家族もまた近代家族的な性格をもつものであったという指摘が、相次いでなされるようになった。明治後半～大正期において、家族員の情緒的結合を重視する「家庭(ホーム)」への志向が出現してきたというのである(〔小山静子、1991〕〔牟田和恵、1988・1990=1996〕〔西川祐子、1990〕など)。

しかし、この日本型近代家族の具体的な内実は、まだ十分に明らかにされたいえない。特にショーター〔1975=1987〕の区別する(1)男女関係・(2)母子関係・(3)家族と周囲の共同体との間の境界線という3分野のうちの(1)、すなわち「ロマンス革命」については、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった。だが、「夫婦愛については、恋愛結婚が社会の中でどういう位置を占めるかによって、相対的な位置づけが変わることとなる」〔アジアの例と比べると、英米の主婦を産み出してきた家父長制の特徴は・・家族

を結びつける情緒として、夫婦愛の持つ比重が相対的に高い点にある〕〔瀬地山、1996:220、226〕と指摘されるように、この部分こそ文化的な差違が極めて大きいところだと思われる。そこで本稿では、日本型近代家族における夫婦関係、およびそれと結びついた男女の「愛」「恋愛」のあり方の固有性を明らかにするための第一段階として、比較対象としての欧米的な近代家族とロマンティック・ラブ・イデオロギーの特質について考察することとする。

こうした問題設定にたつ場合、統計調査などの実証的な方法をとることはできない。ロマンティック・ラブやloveの翻訳語としての「愛」「恋愛」は、何よりも社会的・文化的な理念であって、人はこうした概念を知ることによって、それに相即する感情を初めて発見するからだ。従って、まず何らかの社会的影響力をもつ文献史料に基づいた言説分析を行う必要がある(〔〕内はページを表す)(1)。

2. 従来の定義を巡る問題

ショーター〔前出〕によれば、伝統的家族が近代家族へと変化したのは、(1)男女関係・(2)母子関係・(3)家族と周囲の共同体との間の境界線という、3つの分野での「感情の高まり」による。そして(1)について、18世紀末から19世紀にかけて「ロマンティック・ラブが、かつて男女を結びつけていた実利的な考えにとってかわる」という「ロマンス革

命」が起こったという [5]。他の論者もほぼ同様の見解を示している ([Stone, 1979=1991] [Flandrin, 1981=1992] [Luhmann, 1986] [Giddens, 1992=1995] など)。すなわち、従来の伝統的な結婚は、貴族・ブルジョワジー・農民などほとんどの階層において、本人同士の意思よりむしろ家族の経済的・社会的利害を考慮して、両親や親族ないし共同体によって外的に統制されていた。これに対し、18世紀後半～19世紀初頭にかけて、結婚は男女の「愛」に基づくべしという新しい恋愛結婚が規範的・事実に普及していった、と。

この近代家族と結合した恋愛結婚規範、換言すれば「愛・性・結婚の三位一体」という要請が、しばしばロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ばれる ([上野, 1990] [赤川, 1999] 他)。もっともこの語のさらなる内実については、あまり明確な定義が与えられてこなかった。19世紀の米国におけるロマンティック・ラブについて論じたカレン・リストラ [1989] は、従来のほとんどの論者が、この語を「何らかのロマンスを含むような歴史的現実全てを包括する一般的用語」 [6] として用いてきたと批判している。この「ロマンス」とは、男女の熱烈な、またしばしば反社会的な恋着といった意味だろう。確かにそうした議論は多い。例えば小谷野敦 [1997] は、王朝物語類・和歌・世話浄瑠璃を取り上げ、「日本にはそれ [恋愛] が明治期に導入された、と論じる人は数多い」が「それは間違っている」という [14]。またヨバイなどの慣習をもつ日本の伝統的農村には「恋愛結婚」が存在したとし、明治以降に起きた新しい現象はそれが中流階層にまで普及したことだけと論じる。

しかし、彼らのあげる例が18世紀末以降の欧米におけるロマンティック・ラブや恋愛結婚規範と完全に同質だとは考えられないし、

ここでは両者の共通性を強調することに議論上の利点もない。欧米と日本の生産的な比較を行うためには、ロマンティック・ラブという理念を、より歴史的な文脈に沿った形で明確に規定しておく必要がある。

(a) ショーター

私見では、ショーター [前出] の議論も、以上のような観点からは大きな問題を含んでいる。彼はロマンティック・ラブを「男女関係において自分から進んで何かをしようという自発性と相手の気持になるという感情移入の能力」 [15] という、極めて普遍的な形で定義する。そして「男女関係が実利中心のものから感情中心のものへ変化」 [127] すること、すなわち「ロマンス革命」は、18世紀に伝統的共同体から解放された下流階級の若者から、婚前の性行動の解放を伴って起こったという。これに対して、より「利害」「打算」に支配された都市のブルジョワジーがロマンティック・ラブを受容するのは、19世紀半ば以降のこととされる。こうした見方は、近代家族とロマンティック・ラブの結びつきの相対的な軽視と結びつく。決定的だったのは中流階層に最初に芽生えた「子供の幸福についての〈意識〉」であって、「ロマンティック・ラブではなく、母子関係こそが、近代家族形成の核になった」 [215] と論じられるのだ。

しかし、こうした「伝統的な結婚＝実利中心＝非感情的」という等式には疑問がある。

例えば、日本の伝統的な農村の若者宿やヨバイなどを通じた婚姻慣習は、村内婚という厳格な共同体規制の下にあるが、しかし家格や財産を重視する「家」中心の実利的結婚とは対極的なものと捉えられる。この反証に伺えるように、一定の外的な婚姻統制が存在するからといって、そこに自発性や相互的な感情移入などの感情的要素がないとはいえない。換言すれば、ショーターの定義によると、ロ

マンティック・ラブ・イデオロギーと、前近代社会において広く観察される、特筆すべき財産をもたない下流階層の若者たちの比較的自由的な婚前交際（＝制度化された婚前自由交渉 (institutionalized premarital promiscuity) [上野、1995a]) との違いを、概念的に明確化しがたい。

ショーターの定義に伴うもう1つの問題点は、その存在の実証が実際的にかなり困難となることだ。彼は、結婚相手の選択に際してロマンティック・ラブがどの程度働いているかを、物質的利害の放棄ないし共同体の圧力への抵抗の有無という「『犠牲』テスト」[158] で判断しようとする。具体的には、同村や同身分の内部での同族結婚を嫌うほど、また近い年齢同士で結婚するほど、そこにロマンティックな動機が働いていると推定するのである。しかし、村内婚は確かに長期的には減少しただろうが、それは近代化に伴う社会的移動性の増大の結果として解釈できる。しかも、ショーター自身も認めるように「階級的同族結婚の比率は、現代でもなおかなり高い」[160]。彼はこの事実に関して「同じ階級の者どうしが結婚をする自然的な確率と、現実に結婚した比率を比較」することで、今日「人びとがあえて、同族結婚をしようとしているとはいいがたい」と論じる。だが、この「自然的な確率」がどのように導かれるかも示されておらず、説得力のある議論とはいえない。また同階級内での結婚は、社会的・文化的な同質性が相互的な感情移入を促進するという観点からは、ロマンティック・ラブとより親和的だという見方も成り立つ。実際にショーター自身もこうした見解を取っている箇所もあり、総体的に議論は曖昧で混乱していると評価せざるをえない。

思うに、ロマンティック・ラブを「男女関係において自分から進んで何かをしようという自発性と相手の気持になるという感情移入

の能力」というように非歴史的な仕方で定義し、その実在を統計的に証明しようという試みには、そもそも無理がある。この理念は、何よりも1つの文化的モデルとして、また社会規範として捉えるべきだと考える(2)。極端な想定をすれば、ある社会において全員が同階層内で財産的な釣り合いを主に考えた結婚をしたとしても、皆がそれについて「本当は愛ゆえに結婚すべきなのに、自分たちは勇気がなかった」と内心忸怩たる思いを抱えているとすれば、そこにはロマンティック・ラブ・イデオロギーが一定の普及をみていると想定するべきであろう。従って、ロマンティック・ラブの定義は、あくまで西欧近代という歴史的な文脈の中で、そして方法的には文学・ジャーナリズムといった文化的言説の中から抽出される必要がある。

(b) ストーン

次にストーン [前出] の定義について検討しよう。彼は結婚の動機に4つの類型を区別する [224]。まず(1)家族の経済的・社会的・政治的な補強あるいは拡張という最も伝統的なもので、ショーターのいう(A) 伝統型に対応するだろう。(B) をさらに細分化した残りの3つは、当事者が主導権をもつ個人主義的な類型で、うち(3)は身体的な魅力である。

(2)は「長い求愛期間に吟味された、将来の伴侶の道徳的、知的および心理的な特性についての可能な限り十分な知識に基づいた個人的な愛情、親密な交わりと友情、長期間にわたって性格が一致する可能性についての常識ある、しかも計算された評価など」[同、下線引用者、以下同]。すなわち、合理的(＝十分な知識に基づく冷静な評価)かつ社会と調和的(＝常識的)な類型である。具体的には、ピューリタンたちが17世紀以降に採用し始めた「友愛結婚」を特に指していると思われる。

そして(4)がロマンティック・ラブで、「相手の美点に対する関心の過剰な集中を引き起こすことになる心の平静さの乱れであり、彼または彼女の欠点に対して盲目となり、あらゆる他の選択肢ないし考慮すべき事項、とりわけ金銭といった世俗的な問題を拒絶する」ような動機とされる。換言すれば、非合理的(=盲目的)かつ(少なくとも潜在的には)反社会的な情熱といえよう。彼はこの理念について、18世紀末~19世紀初頭に「巡回図書館の書架を一杯にした」[235] ロマン主義的な流行小説によくみられるものとして捉え、「小説家たちによって発明され、性的欲望の覆いとして男性たちによって採用された、純粹に人為的な感情以外の何ものでもない」[308]として、その文化的モデルとしての性格を強調する。さらにショーターとは全く逆に、このロマンティック・ラブに基づく恋愛結婚は小説を読む公衆、すなわち中流ブルジョワジーから広がっていったとする。下層階級に関係が深いのはむしろ(3)身体的な魅力だという。

ストーンの歴史的に限定的な定義は、ショーターの普遍的なそれよりは曖昧さが少ない。しかし、このように非合理的・反社会的な情熱というだけでは、まだ不明確である。第1に、これではロマンティック・ラブと、他の非西欧文化圏にもみられるロマンス--例えば玄宗と楊貴妃の悲恋--とを、まだ十分に区別できない。第2の問題点は、(2)合理的・社会調和的な「愛情」と(4)非合理的・反社会的なロマンティック・ラブが対立的に捉えられ、かつ近代家族の成立を巡る両者の布置が明らかにされないこと。彼のいう夫婦間の「情愛的個人主義」の基盤としては、一見(2)も(4)と同じ程度に、あるいはむしろそれ以上に相応しいように見える。実際、彼はピューリタンたちが始めた「友愛結婚」に1章を割く一方で、「1780年以降・・・ロマン

チック・ラブが有産階級のあいだで見苦しくない結婚の動機となっていた」[235]が、しかし「ほとんどすべての人々は、結婚を永続的なものにするには、身体上の魅力とロマンチック・ラブの両方ともが不安定な基盤であることを認めていた」[225]と論じる。この議論を敷衍すると、18世紀末以降の近代家族と結びついた恋愛結婚規範をロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ぶのは適切でない、ということになるろう。

しかし、ステイブン・サイドマン[1991=1995]によれば、「激しくロマンティックな情熱というよりも、変わることをない深まりゆく相互の尊敬や愛情」である「ピューリタンの愛」は、「結婚の創始力としてではなく、結婚後に進展するもの」とされ、彼らは「愛ゆえに結婚するのではなく、愛することを学べるような人と結婚するように命じられて」いた[18、下線引用者]。こうした考え方は、やはり19世紀以降に広がった恋愛結婚規範とは異質なものであるだろうか。

3. ロマンティック・ラブの固有性

ピューリタンのな友愛結婚でなく、18世紀末以降に成立したロマンティック・ラブの理念こそが近代家族の基盤であったことを強調する論者に、ルーマン[1986]とリストラ[1989]がいる(3)。両者に共通するのは、この概念を、ストーンのように非合理的・反社会的な情熱という感情としてだけ規定するのではなく、それを起点とする親密な人格のコミュニケーションの過程の総体として捉える見方である。

①基盤としての「神秘的な牽引力」~特殊志向的・官能的・非合理的な情熱~

リストラによれば、17世紀ニューイングランドのピューリタンにとって、愛とは意思によって自発的に統制されるものであり、従っ

て予測できる合理的な感情と想定されていた。彼女は、ヴィクトリア期の米国の中産階級の男女の間で交わされたラブライターを資料として、そこに現れる愛の理念がこれとは全く異質なものであることを示す。そこで愛は、特定のただ1人の異性に対する、意思的に統制できない説明不能な情熱とみなされていたのである。これはストーンによるロマンティック・ラブの規定とはほぼ一致するといっていよう。

この非合理的な「神秘的な牽引力(a mysterious attraction)としての愛というイデオロギー」[186]は、西欧文化の伝統に深く根ざすものと思われる。「恋愛(amour)は12世紀の発明」という有名な言葉が示すように、この時代の南仏の宮廷で生まれたトゥルバドゥールの叙情詩によって、宮廷恋愛(amour courtois)という特異な恋愛の理念が成立した。それは他の騎士道物語のジャンルにも取り入れられ、西欧中に普及していった。ここで愛の対象となる(多くの場合既婚の)貴婦人は、完全な美や徳を備えた存在として理想化され、崇拜される。意思では統制できない不幸な情熱に苦しむ騎士は、〈神とわが婦人〉(Dieu et ma Dame)をモットーに様々な冒険に乗り出す。その中で彼は自らを精神的に高めてゆき、苦難の末に聖杯を発見する騎士のように、あるいはベアトリーチェに導かれるダンテのように、ついには神による救済へと導かれることにもなる。

他方で、宮廷恋愛のこうした精神性は、決してそれが完全に非性的な性格であることを意味しない。騎士の貴婦人への愛は「非肉体的またはプラトニックなものではけっしてなく、「間違いなく肉の結合を目指」している[Flori, 1955=1998:122]。しかし、相手を拘束する婚姻の掟などにより、欲望の最終的な充足=性交渉は延々と引き伸ばされる。そしてまさにこの禁止と延期によって「ちり

と投げかける一瞥、手と手のふれあい、挨拶の一言が重大な特徴をもつ一事件に変貌」し、「純粋に視覚的な接触しかしていない恋人たちの関係が、夫婦間の肉体的結合よりもさらに一層官能的なものとなりうる」のだ[Valency, 1958=1995:38]。このように「騎士が高貴さへと導かれるのは彼の欲求のうちでも最も官能的なものによって」なのであり[同、259]、「至高のエロスである《愛Amor》は、この世に存在しうるすべての愛を超えて、光明に満ちた結合に向って進む魂の飛躍」となる[Rougemont、前出:140]。この最終的な性交渉に限定されない広義の性的要素について、以下では官能的と形容することとする。この官能性と精神性の動的な結合こそ、他の文化圏には希薄な西欧的恋愛の固有性といえよう(4)。

18世紀末以降のロマンティック・ラブにも、中世の宮廷恋愛のようなキリスト教との直接的な結びつきは既に失われているものの、こうした官能性と精神性のダイナミズムという伝統が引き継がれていたと思われる。ロマンティック・ラブ・イデオロギー=「愛・性・結婚の三位一体」という場合、この性は主として狭義の性交渉を意味していようが、それは婚前には-特に女性には対しては-厳格に禁止された。しかし、恋人たちのロマンティックな関係は、騎士と貴婦人の間と同様、純潔であると同時に官能的でもありうる。

こうしたロマンティック・ラブの理念が文学に表現された1例として、リストラが検討した米國中産階級の事例とは対極的な、帝政ロシアの貴族社会を舞台とするトルストイの「アンナ・カレーニナ」[1873~77年]を取り上げよう。この作品の主役はもちろん、不倫の恋の末に悲劇的な最期をとげるアンナである。だが同時に、副主人公レーウインの祝福された恋愛結婚とその後の幸福な家庭生活も、かなりの比重をもって描かれている。レーウイ

ンが最初の頃、未来の妻となるキティに対して抱いた感情は、次のように描写される。

「この冬のはじめ、一年間の田舎暮らしのあとでモスクワに出てきて、シチエルパーツキイ家の人たちに会った時、彼はそこの三人姉妹のうちのだれに恋するよう運命づけられていたかを、さとしたのである。・・・レーウインは恋のとりこになっていた。そのため、彼には、キティがあらゆる点で完璧な人間であり、現世のあらゆるものはるかに超越した存在のように思われ、それにひきかえ、自分は俗臭ふんぷんたる低級な存在なのだから、はたの人々や彼女自身からも、彼女にふさわしい相手と認めてもらうことなど、考えるだけ野暮だ、という気がしてならなかった」[原訳, 1964a:30]。

この2人は同じ貴族階級に属しており、既に恋愛結婚が正統化されていて、外的な障害は何もない(5)。そのためアンナの破滅的な情熱と比べると激しさでは劣るが、やはりロマンティック・ラブの典型的表現といえよう。恋に捕らわれた彼は、もはや彼女に対して合理的な判断—「可能な限り十分な知識に基づいた」[常識ある、しかも計算された評価][Stone, 前出]—を下すことなどできず、時には非現実的なほど美化してしまう。もちろんキティが他の人々の目にはごく普通の女性であることを、レーウインも分かっている。だがそれでも、彼の目には一貫して、彼女は全ての他者と異なる特別な存在として映る。

「彼女はスケート場の向こう端にたたずんで、一人の婦人と話していた。見たところ、その服装にも、ポーズにもこれといって特殊な点はないかのようだった。しかし、レーウインにとって、この大勢の人々の中で彼女を見分けるのは、いらくさの茂みにばらの花を見いだすのにもひとしいほど、たやすいことだった。すべてのものが彼女によって光りかがやいていた。彼女は周囲のすべてをぱっと明るくする微笑であった。

・・・彼は太陽を仰ぐ時のように、彼女を永いこ

と見つめるのを避けながら、下において行ったが、彼女の姿は、太陽と同じように、見つめなくても、目にうつっていた」[38]。

レーウインが感じるキティの「神秘的な牽引力」の中には、宮廷恋愛における騎士と貴婦人の場合と同様、精神的な要素と肉体的なそれが入り交じっている。彼は彼女の内面性にだけ関心をもっているわけではなく、外見にも強く魅かされている。両者のわかちがたい融合は、特に目や表情が重視されることに表れている。

「彼女のことを思う時、彼はその容姿全体をありありと心に描くことができたが、とくに心にかぶのは、いかにも娘らしい形のよい肩の上にごく自然に配された、小さなプロンドの頭と、子供のように清純な善良な表情とであった。顔の表情のあどけなさが、容姿のきゃしゃな美しさ一つにとけ合って、彼が深く心に刻みつけた一種特別の魅力をかもしだしていた。しかし、何か思いがけぬことのように、いつも彼をおどろかせるのは、おとなしい、もの静かな、正直そうな目の表情であり、とくにその微笑だった。彼女の微笑はいつもレーウインを魅惑の世界に運んでくれ、その世界で彼は、幼年時代ごくたまにしか記憶していないような、感動に打たれた和やかな気持を味わうのだった」[33]。

このようにロマンティック・ラブは、唯一のかけがえない対象を目指すという意味で特殊志向的で、かつ官能的な色彩を含む情熱という性格をもつ。性的な牽引力はそもそも合理的に統御したり説明したりできないが、それがただ一人の特定の相手によって特に強く引き起こされるのが何故かという問いにはなおさら答えられないから、極めて非合理的なものでもある。こうした特殊志向的・官能的・非合理的な情熱という意味でのロマンティック・ラブの理念は、19世紀の欧米文化圏に広く普及していたと思われる。

②コミュニケーションを通じた〈間人格的相互浸透〉

このような「神秘的な牽引力」によって惹かれ合った男女は、互いに気持ちを伝えようとする。リストラによれば、19世紀の米国中産階級では、第一歩を踏み出すのは男性側であるべきとされていた。だが、女性側も主として非言語的な形で、すなわち視線や表情などで相手に関心を示すサインを送り、告白を勇気づける。こうして一定の相互的なコミットメントが確認されると、社会制度としての交際 (courtship) が開始され、排他的で極めて濃密なコミュニケーションがもたれることになる。一般的にみて、この時代の恋人たち (courting pairs) や離れて住んでいる夫婦は、1週間に1回以上は互いに手紙を書いていたという。

その中で、恋人たちはしばしば相手に“自由に書く”よう促しており、誠実で開放的な自己開示に高い価値が置かれていた。その根底にあったのは‘真の’‘本質的な’自己という観念、さらには「公／私」の厳格な分離という事態であった。

ヴィクトリア期の中流文化においては、公的 (public) な生活世界と私的 (private) なそれとが厳格に区分されていた。そして人々は、自らのアイデンティティーの最も奥に、社会的役割においては表現されえない本当の自己、すなわち今日個人性 (personality) と呼ばれるものがあると想定していたのである。そしてそれは、ただ1人の愛する相手にだけ開示すべきものとされた。恋人たちは、排他的で親密なコミュニケーションの中で、自らの内面を見つめるよう強く促され、否定的な側面も含めて本当の自己と感じられるものを開示し、さらには発見・創出していったのである。リストラは、このロマンティック・ラブにおける自己の内面性への凝視が、米国の個人主義の発達に大きく寄与したと論じる。

このロマンティック・ラブの理想は、両性に等しく内面化されていた。確かに男性はより理性的な性と見なされ、公的な場では常に厳しい自己抑制を要求された。だが同時に、社会は彼に「私的世界の中でももっとも私的な片隅、すなわち女性とのロマンティックな関係においては感情表現と自己開示を課していた」のである [21]。男性がラブレターの中で表している感情の幅・深さ・強さは、女性とほとんど変わらないという。

こうした親密なコミュニケーションの中には、交際試験 (courtship testing) と呼べるような一定のパターンがしばしば現れた。自分の人格的欠陥や相手の愛に関する不安など、関係進展上で何らかの障害になるような事柄を示し、暗に相手に乗り越えるよう求めるといえるものである。女性は将来の結婚に男性より多くを賭けていたから、より熱心に試験を課す傾向があったが、男性も行わなかったわけではない。このような不安→障害の提示→愛の再保証→次なる不安といった過程を繰り返す内的ドラマは、互いへのロマンティックな愛着をさらに螺旋的に強化する働きをもっていた。

こうして愛し合う「男性と女性は互いの内的生活を極めて密接に分ち合ったため、自分たちの内部存在の一部が融合したと多くの人が感じた」[9]。この感覚は、ピューリタニズムの伝統の中で、神秘的な新生 (rebirth) という宗教的な言葉で語られることもあった。こうした表現は「アンナ・カレーニナ」にもみられる。暗黙のうちに愛し合うようになったレーウィンとキティは、ある夜会で、他の人々から少し離れたところで会話を交わす。この親密で排他的なコミュニケーションの中で、2人は互いの自我が最も奥深いところで触れ合うのを経験し、プロポーズがなされる。

「彼女とレーウィンの間では、二人だけの会話

がかわされていた。いや、それは会話などというものではなく、時を追うごとにますます二人をぴったりと結びつけ、どちらの心にも、二人が踏み入ろうとしている未知の世界への喜ばしい恐れの気持をよび起こしてくれる、何か神秘的な魂の交流であった」「彼女は、レーウインがまわりくどく表現した思想を、完全に読みとり、言いあらわしてくれた。ベストオフと兄を相手の、言葉数ばかり多い、こみいった議論から、いきなり、ほとんど言葉なぞ用いなくとも、このうえなく複雑な思想を簡潔明快に伝え合える世界へ移ったのが、ひどく彼を感動させた」[468, 476]。

愛のコミュニケーションは、手紙や会話といった言語的な形でのみなされたわけではない。ヴィクトリア期の米国でも、婚前の最終的な性交渉は厳格に禁止されていた。他方で、親たちの監視は一般に緩やかで、恋人たちは2人きりで過ごすことが許され、抱擁・キスといった広い意味での性的な振る舞いが大幅に許容されていた。愛し合う男女は、こうした非言語的・官能的なコミュニケーションを通じて、さらに排他的な一体感を強める。愛の起点となる非合理的な「神秘的な牽引力」におけると同様、その後の交際の中にも、精神的・肉体的な側面が分ちがたく融合していたのである。

以上のように19世紀の米国中産階級においては、「ロマンティック・ラブの可能性を容受するという決定だけが突然のもの」であり、「実際の相手との同一化は普通は段階的な過程だった」[29]。このことからリストラは、ロマンティック・ラブを「単一の感情ではなく、2人の人間の間に自己認識と互いへの同一化を育ててゆく過程」[46]として捉える。

ルーマンも、西欧の恋愛文学を資料として、ほぼ一致する議論を行っている。彼によれば、17世紀のフランス文学において、結婚外における情熱恋愛 (amour passion) のための

特別なコードが新たに発達する。この意思で統制できない非合理的な情熱は、その過剰さが引き起こす逆説性—「逃れたくない牢獄」「健康より好ましい病気」などと表現される—によって、単なる性的快楽や結婚といった他の男女関係から切り離されると同時に、その時間的な不安定が強く意識された。例えば古典主義の傑作「クレーヴの奥方」[1678年]の主人公は、ヌムール公を愛するあまり、彼の自分に対する情熱が衰えることを恐れ、夫の死後もその求愛を受け入れずに修道院に入ることを選ぶ。この時代には気質 (temperament) や体質 (humour) といった伝統的な概念が残っており、個人的な発達 (personal development) という想定之余地はなかった。従って、奥方には、ヌムール公と親密なコミュニケーションを重ねることで、互いに精神的に同一化していくといった発想は起こりようもなかった。換言すれば「人々が変わりえなかったがために、愛は不安定だった」のだ[99]。

これに対し、18世紀には2つの新しい動向が目される。1つは人格的な個人性 (personal individuality) の発達である。近代化=社会の機能的分化の過程で、政治/経済システムはますます複雑化し非人格的なものとなっていく。同時に人々は血縁的・地縁的な紐帯からの自律性を高め、固有の世界観を構成する主体として個人化される。こうした新しい個人性の理念には、17世紀とは異なり、環境との絶え間ない交流を通じた変化の可能性が含意されている。もう1つの大きな変化は、性の再評価 (the revaluation of sexuality) である。西欧では中世以来、性を動物的本能として卑しめるキリスト教の伝統的価値観が、圧倒的な影響力を振るってきた。これに対して、特に18世紀後半から「自然」という理念に基づき、性に対して初めて肯定的な視線が注がれるようになる。

ルーマンによれば、18世紀末以降のロマンティック・ラブの理念は、以上の個人化および性の再評価という2つの流れが統合されたところに誕生する。近代社会の巨大な複雑性や偶発性から身を守るために、人々は「各々の個人的でユニークな全特質が重要とされるような社会関係」[13] = 〈間人格的相互浸透 (interpersonal interpenetration)〉を必要とする。換言すれば「親密な世界と遠く非人格的な世界との差異が - すなわち、個人的にしか通用しない体験・判断・対応と、匿名的で普遍的に受容される世界との差異が」[16] 要請されるのだ。そしてこの新しい種類の親密な関係 (intimate relationships) の最適の基盤となるのが、広い意味での性である。恋人たちは精神的・肉体的なものが分かちがたく融合した「神秘的な牽引力」に魅了され、相手をかけがえのない「特別な存在」として際立たせる人格性特性を希求する。そして相互的な合意がなされれば、言語的・官能的な親密なコミュニケーションを通じて、第三者を排除した2人だけの調和的な世界を、すなわち「共通の好みと共通の歴史、共通の性向、様々な話題について話し合い、ともに様々な出来事を評価することからなる世界」を、共に作り上げていく [26]。こうして男女の「愛」とは「他者が主観的にシテスム化した世界観を内面化すること」を意味するようになるのだ [25]。さらにこうした〈間人格的相互浸透〉の過程を通じて、2人の人格性も新しく変化していく。

③ロマンティック・ラブと結婚

既述のように、中世の宮廷恋愛も17世紀の情熱恋愛も婚外関係として想定され、結婚の安定的な基盤と考えられることはなかった。「逃れたくない牢獄」「健康より好ましい病気」と表現される非合理的な激しい情熱は、時間的に極めて不安定とみなされたのである。

リストラによれば、ヴィクトリア期の米国中産階級も、交際期間中の恋人たちが感じる新鮮味・ドラマ・緊張感といったものは、結婚と同時に薄れていくと明確に認識していた。「交際=混乱 (perplexity) / 結婚=安らぎ (repose)」という2分法が社会的に確立していたのである。同時に彼らは、興奮 (excitement) と、相互的な人格の融合としてのロマンティック・ラブとをはっきりと区別した。そして「既に式の前に、一定の満足できる水準の感情的・心理的な同一化を達成しているという前提」[205] のうえで、結婚後もこうした静かな愛がさらに深まっていくことを期待した。

「アンナ・カレーニナ」にもこうした愛の進展の過程が描かれている。レーウインは最初、自らの結婚生活を「他の人たちの生活とはまったく似たところのない」「下らぬ心配ごとなどにさまたげられるはずのない、愛の享楽」「崇高な幸福」として思い描き、「自分と妻の間に、尊敬と愛情に満ちた甘い関係のほかに、何か別の関係が生じうるなどは、まったく想像できなかった」[原訳、1964b:89-90]。だが現実には、早くも新婚数日で夫婦喧嘩を経験し、数か月後には自分たちの生活が細々した家事・社交といった「とるに足らぬような下らぬことだけで成り立って」いるありきたりのものであることを認めざるをえなくなる。

しかし、家事に気苦労を重ねる妻の姿や夫婦喧嘩といったものは、彼にとって「幻滅」であると同時に「思いがけぬ新しい魅惑」でもあった。このように小さな衝突を繰り返しながら生活を共にする中で、2人の「魂」はいつそう結びつきを深めていく。

「自分にとってキティが単に身近な存在であるというだけでなく、今では、どこで彼女が終わり、どこから自分がはじまるのか、それさえわからないことを、彼は悟った」[同上、90]。

「今、ふいにいっさいの覆いがとりのけられて、魂の神髄がその [キティの] 目にかがやくのを見た時、レーウインは自分の目の前に明らかにされたものに対して、やはり強く心を打たれるのをおぼえた。こうした飾りけのない、生地のままの姿の中にこそ、彼の愛している、あの妻の本体がいっそうはっきりと現れていた」[359]。

リストラによれば、19世紀米国の中産階級の男女にとって、結婚は一上の例のように一平凡 (dull) ではあっても、決して愛なきもの (loveless) であってはならなかった。彼らは、共同生活に付随する慣れ親しみ (familiarity) と愛とを区別したのである。夫と妻は、相手への関心を保ち、また義務的な親切からでなくその幸福に配慮し続けることを、互いに要求した。そして結婚後も、交際期間のような熱烈さはなくても、言語的・非言語的なコミュニケーションを通じて愛を表現することが期待されたし、また実際に行われた。例えば、それぞれ結婚して12年と15年になる2人の夫は、その妻に次のような手紙を書いている。

「私は世界中を回って、奇妙なことも興味深いことも山ほど見てきたが、君のことを考えたり、君に手紙を書いたりするほど興味深いことはないよ。もちろん君と一緒にいることを別にして……」[Lystra, 前出:204]。

「私は君のことを夢み、君について考え、君に焦がれ、君の思い出の一つ一つについて神に感謝するよ、愛しい人 (my darling)。私の宝もの、君は私にいつでも愛しく、優しく、助けてくれたし、今でもそうだ」[同、203]。

以上のように〈間人格的相互浸透〉としてのロマンティック・ラブの理念には、最終的な性的結合の成就の時点を超える持続的な発展可能性が内包されている。そしてまさにこのことが、結婚との結合を、すなわち「愛・性・結婚の三位一体」としてのロマンティック・ラブ・イデオロギーを可能にする。

「『ロマンティック』な愛の概念は、2つの面から情熱恋愛を超えようとする。すなわち、無限に強化しうる個人性を組み込むことによって、そして (自らがこうして保証する) 永続性の見込み=結婚との調和によって。愛は結婚の基盤となり、結婚は愛を繰り返し確認するという課題となった」[Luhmann, 前出: 141]。

ここで17世紀のピューリタンの友愛結婚と、ロマンティック・ラブ・イデオロギーとの差を確認しておきたい。既述のように、ピューリタンたちは、愛を意思的に統御できる合理的な感情とみなし [Lystra]、また「愛ゆえに結婚するのではなく、愛することを学べるような人と結婚する」べきだと考えていた [Seidman]。こうした愛の理念には、信仰に厚く道徳心が高いといった一定の普遍的な条件が満たされるなら、ほとんどの相手を意志的に愛せるはずという想定が潜在しているのではないだろうか。換言すれば、ここにはロマンティック・ラブに含まれる官能性だけでなく、ただ1人のかげがえのない存在を目指すという特殊志向性も欠けていると考えられる。

こうしたピューリタンたちの普遍志向的・精神主義的・合理的な愛のあり方は、確かに「長期間にわたって性格が一致する可能性」を高めるかもしれない [Stone, 前出]。しかし、19世紀に正統化される恋愛結婚とは、ロマンティックな情熱恋愛が結婚相手を選択する原理になるということなのだ。こうしたロマンティック・ラブ・イデオロギーの根底にあるのは、愛し合う男女が「神秘的な魂の交流」といった排他的な人格的融合を作り上げていくためには、その起点に「神秘的な牽引力」、すなわちかけがえのない特別な存在への意思で統制できない官能的な愛着が要請されるという想定であろう。

④ロマンティック・ラブ・イデオロギーを支える社会装置

以上のように欧米の近代家族は、ロマンティック・ラブの理念を基盤とした恋愛結婚という方法によって成立する。リストラによれば、米国の中産階級の親たちは1830年代までに、子供の結婚相手の選択に関して、拒否権という形の統制力すら完全に失っていた。親などの第3者は、結婚に付随する家庭的・職業的ないしその他の義務の遂行能力についてなら、客観的に判断しうる。だが、ロマンティック・ラブに固有のもの、すなわち恋人たちの「互いへの感情的な解放性や人格的な満足という私的体験」[158]は評価できないとみなされたからだ。もっとも「抜け目ない親たちは、子供の友人の範囲を操作することで、経済的・社会的な地位という観点からみて不適切な結婚の機会を減らした」のだが[164]。

ところでロマンティック・ラブに基づく恋愛結婚に限らず、ピューリタンのな友愛結婚でも、当事者の意思がある程度尊重される結婚方法を採用する限り、未婚男女の出会いとある程度の自由な交際を仲介するために、何らかの社会装置が必要になる。

ストーン[前出]によれば、17世紀末以降の西欧社会では、「若者たちがそれによって永続的な愛情に基づいた合理的な選択を行うことができる立場に立てるように、お互いの性格と気質とを自由に結びつけたり試練し合ったりすることができるいくつかのしくみ」が考案されてきた[271]。具体的には「地方都市での舞踏会、トランプ遊びをするパーティーや集会、とりわけ年に二回ある巡回裁判のときや毎年催される大きな縁日あるいは競馬などの見世物」[同]などが、結婚仲介のうえで重要であったという。

こうした様々な結婚の仲介装置の中でも特に重要だと思われるのが、ダンスパーティーである。この制度には古くからの伝統がある。

例えば16世紀を舞台とする「クレヴの奥方」でも、奥方とヌムール公の出会いはルーヴル宮の舞踏会に設定されているが、こうした宮廷舞踊は「せいぜい指先がふれるていど」のものだった[工藤、1998:8]。これに対し、デズモンド・モリス[1971=1993]によれば、19世紀には重大な変革が起こった。18世紀までのダンスは集団性が強く、「ちょっとした小規模のパレード」のようなもので、一对の男女の肉体的な「接触度はごく制限されているから、性的な問題にはならない。たかだか社会的な交歓を深める程度」であった[257]。これに対し、19世紀初めに出現したワルツは「最初の接近した二人舞踊」[Morali-Daninos、1963=1966:70]であり、「これによって人類史上はじめて、ダンスに興じる男女が抱擁の形をもつことになった」[Morris、同]。ワルツに対しては当初、猥褻だという批判の声も強かったが、結局は定着していく。そしてこれ以降、20世紀初めのタンゴに至るまで、様々な高接触型のダンスが新たに考案された。

ワルツの出現とロマンティック・ラブ・イデオロギーの確立がほぼ時を同じくするのは、偶然ではあるまい。この新種のダンスは、上中流階層の舞踏会という制度に組み込まれることにより、若い男女が、大勢の立ち会う場所で、不特定のしかも階層的に注意深く選ばれた相手と、濃密な身体的接触を持つことを可能にする。「他の場合には許されないような、唐突かつドラマティックなボディタッチの親密性への発展が、社会の秩序にそった行動として認められている」のだ[Morris、同:255]。踊っている間、2人は目と目で語り合い、官能の目覚めを感じ、言葉によらずに気持ちを伝え合うことができる。ホールの片隅に短時間だけ2人で引っ込んで時を過ごすこともできる。「アンナ・カレーニナ」でも、アンナと恋人ヴロンスキーの出会い・レーウインのキティへの愛の告白といった重要な場面

の多くで、舞踏会という設定が使われている。

さらには女性が舞踏会で着用するドレスも、ロマンティック・ラブ・イデオロギーを支える巧妙な社会的装置の1つと考えられる。鹿島茂 [1997] によれば、コルセットとデコルテが流行した19世紀のモード（特に夜会服）においては、女性の上半身（肩と胸）は常に男性の視線に曝されていた。これに対し、下半身（脚）は完全に覆い隠され、男性の前で露出することはタブーであったという。ここにも、官能をかき立てつつその最終的な充足を禁止するという、同一の構造を読み取ることができる。

このダンスパーティという制度は、その豪華さやドレスのセクシーさの程度は様々に異なったものの、19世紀以降、欧米文化圏の中流以上の階層に広く普及していた。例えば南北戦争時の合衆国北部を舞台とするオルコットの小説「若草物語」[1868~69年]でも、プロテスタントの貧しい家の娘たちが、裕福な友人の家のダンスパーティに招待され、手持ちのドレスで精一杯おしゃれして出かける場面がある。男女数人のグループで大人しいゲームをしたりして健全に楽しむのだが、それでも主人公はそこで、将来プロポーズされることになる青年に出会い、しばし2人きりで語り合う。また英国の中産階級出身のアガサ・クリスティ [1890年生まれ] はその「自伝」[1977=1995] で、20世紀初頭の娘時代を回想して次のように述べている。

「社交界にデビューする」ということは、若い女性の人生では重大なことであった。裕福な家であつたら、母親が娘のためにダンス・パーティを開いてくれる。ロンドンの社交季節（5月から7月まで）に出ていくものとされている。「若い娘たちはダンスへ出かけているんな青年と会う。娘たちの母親も同席し、付添いとしてうんざり座っているが、まったく何の力もなかった。いうまでもなく、自分の娘に交際を許して

いる青年については十分に注意をしてはいるものの、やはり選択の余地は広く残っていた」[307, 308]。

ブルジョアジーの社交制度の中には、ダンスパーティ以外にも、一方では最終的な性交渉に至ってしまう危険性を厳密に排除しつつ、他方では一定の官能的要素を取り込む様々な巧妙な仕掛けが組み込まれていた。例えば、老若男女が大勢で野外で過ごすピクニックも広くみられた行事の1つだが、そこでも若い男女が少しの間差し向かいになることができた。例えば「アンナ・カレーニナ」では、家族や友人が子供連れで森にきのこ採りに行き、互いに好意を持っているらしい男女を意図的に2人きりにして、告白の機会を与える。また盛装して出かけるオペラなど、劇場も重要な出会いの場である。

以上のような社交制度の一部としての集団的な出会い仲介装置に対して、一定の相互的なコミットメントがなされた後の一対での交際 (courtship) のあり方については、欧米文化圏の中でも社会的・階層的・宗教的な差違が大きい。自由度という点では、恋人たちが2人きりで相当程度の肉体的接触をもつことのできた米国が、おそらく一方の極にあるだろう。またクリスティ [前出] によれば、フランスでは若い男女が2人きりでおいておかれることは絶対なかった。だが、英国では一緒に散歩やスポーツをすることができたり、あるいは「ダンスをした後、月光のもとへぶらりと出るとか、温室の中へぶらぶらはいるとか、楽しい二人きりの密話」[317] をもつことも作法違反ではなかった（もっとも、ホテルへ一緒にお茶を飲みに行くのは『きわどい感じ』だったという）。英米以外でも、ここまで自由なものでなくとも、ある程度の交際は社会的に許容されていたと思われる。

4. ロマンティック・ラブ・イデオロギーの2類型

次に狭義の性、すなわち最終的な性交渉が、19世紀～20世紀前半の近代家族の夫婦関係の中にどのように組み込まれていたかについて、概略的にみておきたい。

ほぼ19世紀を覆うヴィクトリア時代は(6)、「自然で強力な性本能という近代的観念」を創出し[Seidman、前出:20]、ある意味で性に憑かれた社会であった。この時期の性に関わる言説を巡っては、現在2方向の評価がみられる。

荻野美穂[1994]によれば、この時期には男性の性欲が「肉欲的・攻撃的・乱交的」[30]なものと想定されたのに対し、女性については対極的に「性欲不在(passionless)の神話」が語られ、性の二重基準が通底していた。また生殖目的以外の性交渉を控えるよう忠告する論者も多かった。これに対し、世紀転換期には従来と異質な性意識が出現してくる。新しい国際的な研究分野である性科学が勃興し、それが「性を隠蔽し抑圧すべきものとしたそれまでの観念やタブーを打破し、『科学』の名のもとにあらゆる局面から性を研究しようとした」[214]。ハヴロック・エリスを始めとする性科学者たちは、「男性＝能動的・征服的／女性＝受動的・被支配的」という対極的図式を引き継ぎ強化する一方で、「女にも性欲があるし性を楽しむ権利もある」ことを強調し、そのために避妊の必要性も認めた。

これに対してリストラは、近年の歴史的研究の進展の結果、ヴィクトリア期に関する以上のような「抑圧仮説」は根底的に揺らいでいると述べる。彼女によれば、女性の性的欲求の存在は一般的に認められていた。もっとも多くの場合、男性のそれより弱いとみなされてはいたが。またこの時代の性に関わる言説は多様であって、夫婦間の性交渉を生殖目的に限定しようとする「抑圧派」は、影響力

の低い少数派に過ぎなかったという。

サイドマンも「ヴィクトリア時代の人生案内の本の書き手は、頻度に節度があつて、官能的欲望を刺激しないかぎり、結婚における性の重要性を承認していた」と述べている[30]。他方で、思潮的に1890年代以降をポスト・ヴィクトリア時代として捉え、この時期に「愛の性愛化」という新しい考え方が広がり始めたと論じる。すなわち「性的引力は愛の印だと受け取られ、性的快楽の授受は愛の証明だと見なされ、持続した性的な憧憬や満足ということが、愛の維持のための条件」とみなされ始めたのだ[10-11]。

以上のようにヴィクトリア期の性に関わる言説についての見解は、近年大きく揺れ動いている。それでも世紀転換期以前に、夫婦が性交渉において相互的な快楽を得ることが、結婚生活の不可欠な基盤として強調されていたことは、少なくとも確かだと考えられよう。換言すれば「愛・性・結婚」の一致という規範は、夫や妻が他の第三者と性関係をもたない限り、問題なく維持されていると想定される。以上のような考え方をヴィクトリア朝型ロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ぶこととする。

20世紀に入ると、大量生産・大量消費を可能にする資本主義の発達の中で、女性は教育水準の向上にも支えられ、会社事務員や知的職業人として経済的に自立することが以前より容易になった。また第一次世界大戦中には、女性は出征した男性に代わってますます戦場に進出し、この史上初の総力戦を銃後で支えた。こうした中で大戦後には、性に関して平等主義的なリベラル派の改革者たちが多数現れ、「相互の性的な魅力や満足に基づいて形成され維持される結婚だけが、幸福で永続的な結婚になりえる」というメッセージを掲げ始める[Seidman、同:99]。「家族の絆を強め幸福な結婚を実現するための重要な要素として、以前には否定されていた夫婦間の性

愛に注目が集まる」のである〔荻野、同:225〕。

その最も早い例が、1918（大7）年に出版されたマリー・ストープスの「結婚愛」である。ストープスは、エリスらの著作を参照しつつ、正規の婚姻内という限定つきながら「たがいに魅かれあう男女の肉体的結合のすばらしさ」を賞揚し〔荻野、同:227〕、「性交のさいに男女が同時にクライマックスに達することの重要性と、女のオーガズムの権利」を強調する〔230〕。そして性科学の示した「男性＝能動／女性＝受動」という対極的図式を受け入れ、妻は夫を通じてのみ性的充足を獲得すると論じたのである。この本は、第二次世界大戦までに100万部を売るベストセラーとなり、多大な影響力をもった。

産児制限運動で有名なエリザベス・サンガーも、1926（昭元）年に「結婚の幸福」という本を出しているが、これも多くの点で「結婚愛」に通ずるものであった。荻野は、この2つの著作の共通性について、次のように論じている。

「彼女たちの本には性について、とりわけ女の性はいかにあるべきかについて、当時の中流階級の読者が読みたいと期待していたようなメッセージがふくまれていた。・・・そのメッセージとは、まず女の性衝動と（男と同じように）性を楽しみたいという欲求の正面からの肯定である。サンガーとストープスはそれを結婚という制度と結びつけて、妻の性

欲の解放と満足こそ、結婚と家庭を磐石の基盤におくための秘訣であると主張することで、すでに以前から高まりつつあった女たちの性の快楽への欲求に正当性の根拠をあたえた。女の性欲はもはや恥じて隠すべきものや異常なものではなく、少なくとも結婚の枠内で発揮されるかぎりにおいては、幸福な結婚の実現のための基本的要件とみなされるようになったのである」〔247-8〕。

同年に出版されたヴァン・デ・ヴェルデの世界的ベストセラー「完全なる結婚」も、

「女性の人格性に男性とまったく対等なものとの承認を与えた上で、性愛を積極的に価値づけ、賞揚する」〔橋爪、1995:196〕という点で、これらと通底するものだった。ただストープスは、前戯などの重要性を指摘しつつも、その具体的説明は行わなかった。これに対し、医師であるヴェルデの著作は、性交体位を体系的に示すなど科学的で詳細な記述を行ったという点で画期的であり、実際的により大きな影響力をもったと考えられる。

以上のようなリベラル派の男女平等主義的な性愛観の中では、「愛・性・結婚の三位一体」という要請が、19世紀的なそれとは異質なものに容れられている。既に論じたように、ヴィクトリア型ロマンティック・ラブ・イデオロギーにおいては、夫や妻が他の第三者と性関係をもたない限り、この3者の一体性は問題なく維持されていると考えられた。しかし今や「愛＝性」の一致とは、こうした消極的な貞節遵守だけではならず、夫婦が性交渉を通じて同等に満足を得ること、より具体的にはオーガズムの同時的達成という、極めて積極的な要請を掲げるに至ったのである。換言すれば、愛とセックスは、後者が前者の最高の実現であるという形で、不可分に結びつけられる。こうした新しい考え方を、20世紀型ロマンティック・ラブ・イデオロギーと呼ぶことにしよう。

*

以上において、欧米の近代家族とそれを支えたロマンティック・ラブ・イデオロギーの固有性について、その歴史的・文化的文脈の中で論じた。今後の課題として、こうした思想が近代日本の伝統と風土の中でどう定着していったかを、具体的資料に基づいて明らかにしていきたい。

注

(1) スティーブン・サイドマンは「アメリカ人の愛し方」[1991=1995]において、その目的を「行動を説明することではなく、文化的な理念や規範について正確に記述すること」におき、そのために種々の記録文書（人生案内の本、通俗医学書、日記・書簡・自叙伝などの個人的文書、小説、セックスの調査研究）の分析という方法をとっている。本稿も、基本的にこれと同じ立場に基づく。

(2) ショーターも、男女のロマンスにおいて「文化が愛情表現の一連の『モデル』を与えて」いることを認める。だが「かれらはそのことを意識しているわけではなく、「かれらの経験するすべてが、かれらのかわすれぐさすべてが、かれらの作りあげた愛情表現すべてが、かれら自身の奥深い内面から自発的にわきでてきたものである」として [16]、あくまでも自発性に重点をおいている。

(3) 以下、この2論文からの引用は大塚の訳による（Lystraは原文から、Luhmannは英訳からの重訳）。訳文の下線は原文ではイタリックである。

(4) 小谷野敦 [1997] は、西欧の恋愛の特質を「女性崇拝の要素をもつ、〈男の恋〉」であるという点に求め、そうした性格が紀元前1世紀のローマの恋愛エレギア詩に見られることから「トゥルバドゥール詩は西洋文学史の枠組のなかにおいてさえ、全面的に新しいとはいえない」[80]と論じる。だが、以下で論じるように、宮廷恋愛の固有性は単に「男性が女性を崇拝する」という形だけにあるのではなく、そのことが苦悩を通じた精神的向上として宗教的に意味づけられているところにある。従って「恋愛は12世紀の発明」という定説に異議を唱える小谷野の議論は、充分なものではないと考える。また彼は、西欧的恋愛と「伊勢物語」「源氏物語」といった日本の物語文学が〈男の恋〉という点で共通すると論じる。これに対し、佐藤忠男

[1996b] は、この2作品を「男と女の性的な執着心も永遠のものではあり得ず、果敢ないものであるという仏教の観念の影響の下で、浮気な男のうつろいやすさを嘆いた」作品として捉え、騎士が貴婦人に忠誠を尽くすといった西欧的な物語と対比する [267、下線引用者]。この差違は重要だろう。以上のことから、西欧的恋愛＝〈男の恋〉という捉え方は不十分だと考える。

(5) 既に見たように、ショーターは、結婚や恋愛の相手の選択に際してロマンティック・ラブがどの程度働いているかを、物質的利害の放棄と共同体の圧力への抵抗の有無という「『犠牲』テスト」で判断しようとする。レーウィンとキティの場合、このテストでは全く得点をあげることができないだろう。このことから、ショーターの定義と方法論は不十分なものであると評価せざるをえない。

(6) ヴィクトリア時代の開始と終わりをどう区分するかについて、サイドマンは1890年代以降をポスト・ヴィクトリア時代と捉えているし、萩野は1901～10年のエドワード7世期までを含める。本稿では、厳密な時代区分には立ち入らず、19世紀後半を典型とする「ヴィクトリア朝的なもの」という意味でこの語を用いることとする。

引用文献

- Christie, Agatha 1977 "An Autobiography"
=1995 乾信一郎訳「アガサ・クリスティー自伝」、ハヤカワ文庫
- Flandrin, Jean-Louis 1981 "Le Sexe et l'Occident:
Evolution des attitudes et des comportements", Editions du Seuil
=1992 宮原信訳「性の歴史」、藤原書店
- Flori, Jean 1955 "La chevalerie en France au Moyen Age", Presses Universitaires de France
=1998 新倉俊一訳「中世フランスの騎士」、文庫クセジュ
- Giddens, Anthony 1992 "The Transformation of Intimacy:
Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies", Polity Press
=1995 松尾精文・松川昭子訳「親密性の変容」、立書房
- 小山静子 1991 「良妻賢母という規範」、勁草書房
- 小谷野敦 1997 「<男の恋>の文学史」、朝日選書
- ……………1999 「ロマンティック・ラブとは何か」 in 「近代日本文化論11 愛と苦難」、岩波書店
- Luhmann, Niklas "Liebe als Passion", Suhrkamp Verlag
=1986 "Love as Passion", Polity Press
- Lystra, Karen 1989 "Searching the Heart: Women, Men, and Romantic
Love in Nineteenth-century America", Oxford University Press
- Morali-Daninos 1963 "Histoire des Relations sexuelles", Collection QUE SAIS-JE?
=1966 篠原秀夫訳「性関係の歴史」、文庫クセジュ
- Morris, Desmond 1971 "Intimate Behavior", Jonathan Cape Ltd
=1993 石川弘義訳「ふれあい」、平凡社ライブラリー
- 牟田和恵 1996a 「セクシュアリティの編成と近代国家」
in 井上俊也編「セクシュアリティの社会学」、岩波書店
- ……………1996b 「戦略としての家族」、新曜社
- 西川佑子 1990 「住まいの変遷と『家庭』の成立」
in 女性史総合研究会編「日本女性生活史 第4巻 近代」、東京大学出版会
- 落合恵美子 1989 「近代家族とフェミニズム」、勁草書房
- ……………1994 「生殖の政治学」、山川出版社
- Rougemont, Denis de 1956 "L'AMOUR ET L'OCCIDENT", PLON
=1993 鈴木健太／川村克己訳「愛について(上・下)」、平凡社
- 瀬地山角 1996 「主婦の比較社会学」 in 井上俊也編「現代社会学19<家族>の社会学」、岩波文庫
- Love in America 1830-1980", Routledge
=1995 椎野信雄訳「アメリカ人の愛し方～エロスとロマンス～」、勁草書房
- Shorter, Edward 1975 "The Making of the Modern Family", Basic Books
=1987 田中俊宏・岩瀬誠一・見崎恵子・作道潤訳「近代家族の形成」、昭和堂
- Stone, Lawrence 1979 "The Family, Sex and Marriage in England,
1500-1800. Abridged edition", Penguin Books
=1991 「家族・性・結婚の社会史 1500-1800年のイギリス」、勁草書房
- トルストイ 1873-77
=1964a・b 原卓也訳「世界の文学 アンナ・カレーニナ・・・」、中央公論社
- 上野千鶴子 1994 「近代家族の成立と終焉」、岩波書店
- Valency, Maurice 1958 "IN PRAISE OF LOVE:
An Introduction to the Love-Poetry of the Renaissance", Macmillan
=1995 沓掛良彦／川端康雄訳「恋愛礼讃」、法政大学出版会